

宇宙を読む一言語・文学と宇宙観一

1.宇宙に関連する用語

「宇宙*」：「淮南子」天文（齊俗）訓，（日本書記）

「太始，虚_{ギョ}^{*1)}を生じ，虚_{ギョ}^{*1)}，宇宙を生じ，宇宙，氣を生ず。

「宇」＝空間的広がり，天地四方。（天の覆う所。）

「宙」＝時間的な延長，古往今来。（地の由る所。）

「宇宙」 = 4次元の時空間（物理学）。天地。

- 1) 天地四方と古往今来.
- 2) 世間または天地間. 万物を包容する空間.
- 3) 物理学的には, その中に物質および輻射 (光) が存在しうる限りの全空間. 天文学的にはすべての天体を含む全空間.

*アメノツチ（天地）と読む。

* 1) =空間的広がり

類語：氣宇壮大，宇宙開闢（かいびゃく）

「自然」

- 1) 自らそうになっている様子。天然のままで人為の加わらないさま。
(⇔人工)
- 2) 人力によって変更，形成，規整されることなく自らなる生成，展開によ
って成りいであつた状態。(⇔文化) (自然(しぜん)と読んでいた。)
- 3) 自らなる生成，展開を惹起させる根源的な造化の力。
- 4) 人間を含めて天地間の万物。宇宙。
- 5) 物体界とその諸現象。(⇔精神)
- 6) 普遍性，反復性，法則性，必然性の立場からみた世界。(⇔歴史)
- 7) 因果的必然の世界。(⇔自由，当為)
- 8) 「歌舞伎」万一の事の発生すること。

「世界」

- 1) [仏教] 「世」＝過去，現在，未来．「界」＝東西南北上下．ひろく衆生の住む範囲．
- 2) 宇宙．
- 3) 地球上の人間社会の全体．すべての国々を含む全地域．
- 4) 国，土地，地方．
- 5) 世の中，世間．
- 6) 同一種類のものの集まり．
- 7) ある特定の範囲．
- 8) [歌舞伎，狂言] その趣向の背景となる特定の時代，人物，場所．

Cosmos :

- 1) the world or universe regarded as an orderly, harmonious system
- 2) a complete orderly, harmonious system
- 3) order, harmony (⇔ chaos)
- 4) any of a genus, *Cosmos* of New World composite plants having open clusters of flowers with red or yellow disks and wide rays of white, pink, or purple

類語 :

ギリシャ語のkosmos = order, form, arrangement, the world or universe
cosmology
cosmetic (cosmetic change ⇔ fundamental change)
cosmopolis
cosmopolitan
cosmopolite
chaos=間隙 (gas) の語源

Nature:

- 1) the natural world as it exists without human beings or civilization
- 2) the elements of the natural world, as mountains, trees, animals, or lives
- 3) natural scenery
- 4) the universe, with all its phenomena
- 5) the particular combination of qualities belonging to a person, animal, thing,

or class by birth, origin, or constitution; native or inherent character

- 6) the character, kind or sort
- 7) characteristic disposition, temperament
- 8) the natural, primitive condition of humankind
- 9) biological functions or urges
- 10) the laws and principles that guide the universe or an individual

World:

- 1) the earth or globe, considered as a planet
- 2) a particular division of the earth
- 3) the earth or a part of it, with its inhabitants, affairs, etc, during a particular period
- 4) humankind; the human race ; humanity
- 5) the public generally
- 6) the class of persons devoted to the affairs , interests, or pursuits of this life
- 7) a particular class of people, with common interests, aims,, etc.
- 8) any sphere, realm, or domain , with all pertaining to it
- 9) everything that exists; the universe, the macrocosm
- 10) one of the three general groupings of physical nature
- 11) any period , state, or sphere of existence

Universe:

- 1) the totality of known or supposed objects and phenomena throughout space;
the cosmos, macrocosm
- 2) the whole world, especially with reference to humanity
- 3) a world or sphere in which something exists or prevails
- 4)

類語 : universal,
university,
uniform,...

2. 日本文学における宇宙

2.1 万葉の暗い星空

「万葉集」の星など天体を題材にした歌は非常に少ないが、次の歌は例外的なひとつ。

天の海に 雲の波立ち月の船 星の林に漕ぎ隠る見ゆ（「万葉集」巻七、1068）

古代の日本において、天体があまり歌の題材にされなかった理由の一つは、中国渡来の天の思想（天地人の思想）とそれにつながる国家占星術の存在があったと思われる。

2.2 平安時代、鎌倉時代

「建礼門院右京大夫集（一うきょうのだいぶしゅう）」

月をこそ眺めなれかし 星の夜の深きあわれをこよひしりぬる

眺むれば心も尽きて星合の空に満ちぬるわが思ひかな

（建礼門院は平清盛の娘で、高倉天皇の後であり、右京大夫はそのそばに仕えた。恋人である平資盛は壇ノ浦合戦で戦死。）

菅原道真

天つ星 道も宿りもありながら 空に浮きても思ほゆるかな

（罪人として九州太宰府に送られるときの歌）

（道真が失意のうちに死んだ後、都にはおびただしい雷雨などの災害に見舞われた。彼を追放した人たちはあわてて彼の霊をまつり、天の神様、「天神さま」にまでまつりあげられた。）

「古今和歌集」読み人しらず

大空の月の光し清ければ影見し水ぞまづこおりける

（月を愛で眺める観月の習慣の輸入と普及は9世紀ころらしい。）

藤原定家の「明月記」：超新星の記録（2件）

源氏物語：宮廷恋愛物語か作者の宇宙観の提示か？

ここでいう宇宙観とは

光源氏一代の幻を求める心と

次代まで含んだ物語は生死の境を超えて愛の因果に仕組まれた非情さの意味である。

2.3 江戸時代

松尾芭蕉「奥の細道」

荒海や佐渡に横たふ天の川

2.4 現代

山口誓子

寒き夜のオリオンに杖さしいれむ

加藤愀邨

生きてあれ冬の北斗の柄の下に

夏目漱石

別るるや夢一筋の天の川

宮沢賢治「春と修羅」:

.....
これらについて人や銀河や修羅や海胆(うに)は
宇宙塵をたべ、または空気や塩水を呼吸しながら
それぞれ新鮮な本体論もかんがえませうが
それらも畢竟こころのひとつの風物です

(宮沢賢治は仏教、相対論、宇宙論にもつよい関心を持った。)

若山牧水

かの星に人の棲むとはまことにや 晴れたる空の寂し暮れゆく

(明治44年の作で、火星に高度な文明が存在するという説が流布していた。)

草野心平「空間」(詩友、中原中也の死を悼んで、1939年。)

中原よ。
地球は冬で寒くて暗い。
ぢや。
さようなら。

草野心平「夜の天」

天は。
螺鈿(らでん)の青ガラス。
しらくもの川は。金平糖の星空は。紅のやうないくつもの層をくぐれば。
ずんずんずん。

火を噴くひまはり。
とろけるザボン。
渦巻きまはるかたつむり。
地にふれる空気天からはじまって太陽の熱や億馬力。
宇宙の場から生きるエネルギーはなだれてくる。人間よ普遍であれろ祈る
やうなその普遍。

実在はしかし。
涯なく暗く。
天までつづく田ん圃によどむ天を踏み。
きらめく螺鈿の下をゆく。

谷川俊太郎「二十億光年の孤独」

人類は小さな球の上で
眠り起きそして働き
ときどき火星に仲間を欲しがったりする

火星人は小さな球の上で
何をしているか 僕は知らない
(或いはネリリし キリリし ハララしているか)

しかしときどき地球に仲間を欲しがったりする

それはまったくたしかなことだ

万有引力とは
ひき合う孤独の力でもある

宇宙はひずんでいる
それ故みんなはもとめ合う

宇宙はどんどん膨らんでいく
それ故みんなは不安である

二十億年の孤独に
僕は思わずくしゃみをした

「昴」(谷村新司作詞)

眼を閉じて何も見えず 哀しくて目を開けば
荒野に向かう道より 他に見えるものなし
嗚呼 砕け散る宿命(さだめ)の星たちよ
せめて密やかに この身を照らせよ
我は行く 蒼白き頬のままで
我は行く さらば昴よ

(昴(すばる)はプレアデス星団のことで、冬の星座の王者オリオンが昴に
続いて昇ってくる。)

2.5 大江健三郎「みずから我が涙をぬぐいたまう日」などにおける宇宙観

.....

森のなかの谷間の村という構造の全体性により、「中心」と対峙する「周縁」性
にたった「宇宙モデル」の造形が可能になるという着想だったと思われる。

.....

ある鼎談の中で大江はいう

「自分の内宇宙的なものを含み込んで、森というものがあり、谷間というものが
あるという、それだけ表現したいために作家として生きてきたという気持ちが
いまはある」、
「その四国の小さな村が、ぼくにとっては宇宙論的にも、内宇宙的にももっとも
重要なものだということを言い張り続けるために、物語を探してきたと思います。」

2.7 田口ランディ:「書くことは宇宙観の編集」(朝日新聞2001.8.26)

3.外国文学における宇宙観

3.1 古代バビロニア創造神話「ギルガメッシュ物語」

3.2 旧約聖書における全知全能の神による天地創造説

3.3 古代インドの創造神話「リグ・ヴェーダ」

3.4 ダンテ「神曲」におけるキリスト教宇宙観 (調和・秩序・位階のある同心球殻構造の有限宇宙)

3.5 シェイクスピアの作品におけるキリスト教宇宙観

3.6 ジェームズ・ジョイス「若き日の芸術家の肖像」における 主人公の遠心的自己感覚

Stephen Dedalus	スティーヴン・ディーダラス
Class of Elements	初等学級
Clongowes Wood College	クロンガウズ・ウッド学寮
Sallins	サリンズ町
County Kildare	キルデア郡
Ireland	アイルランド
Europe	ヨーロッパ
The World	世界
The Universe	宇宙

(彼はその詩を下から読んだ。すると、詩にならなかった。それから彼は見返しの頁を下から上へ、最後の自分の名前のところまで、読んだ。これがぼくだ。それから彼はまた下にむかって読んだ。宇宙の次はなんだろう？ 無だ。すると宇宙のまわりには、宇宙はここで終わって、ここから無の場所が始まるということを示すものがなにかあるのだろうか？ 壁のはずはない。しかし、あらゆるもののさかいには、ぐると細い細い線があるはずだ。あらゆるものとあらゆる場所のことを考えるのは、たいへんなことだ。神さまだけがおできになることだ。彼はそれがどんなにたいへんな思考にちがいないか考えようとした。だが考えられたのは神さまのことだけだった。)

3.7 英語国人(西欧人)における背景としての宇宙観

(1) 人名代名詞の日英比較

日本語人名代名詞は対面している相手との関係で相対的に決まる。

「私(わたくし、わたし)」→公に対する言葉

「僕」→相手を主人とみて自分を下僕として卑下語

「俺」→相手を卑しめて呼ぶ言葉

英語人名代名詞

I, you, he, she : 形而上的な「人格的存在」としての人間を指す。

this man, that man, this, that : 目に見える形而下的な「物理的存在」としての人間を指す。

===>英語国人はあらゆる人間を自分と同一平面上の存在と見る。

日本人は「高い円筒上構造物」の中央の空間の中空に浮かん

でいて、上層や下層に姿をあらわした相手に対応せねばならないとき、その度に、自分の「位置」が動く。

(2) 自己と宇宙の間

英語国人の遠心的思考・発想法:

自分の(宇宙における)位置を測るのに、自分から出発して、
そして行きつく果て(全知全能の神)を考える。
自己は不動である。

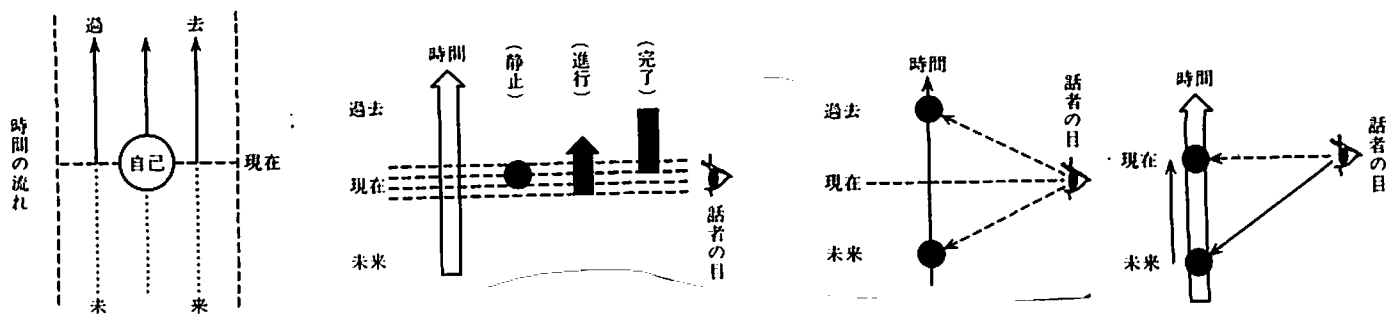
宇宙が厳然と存在している→必ず存在の始りが必要
→存在の始りがあるなら創った者がいるはず。

時間の表現形式: 時間感覚は鋭敏、時間は流れる。
事象の中に「動」を感じる。

現在形、現在進行形、現在完了形
過去形、過去進行形、過去完了形、過去未来形
未来形、未来進行形、未来完了形

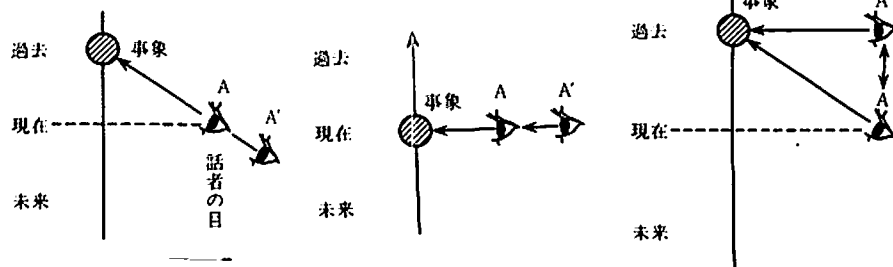
日本人の求心的思考・発想法:

自分の(宇宙における)位置を測るのに、適当な領域(世間、うち)
から出発して自分に行きつく。適当な領域(世間、うち)の外には



日本人の求心的思考・発想法:

自分の(宇宙における)位置を測るのに、適当な領域(世間、うち)から出発して自分に行きつく。適当な領域(世間、うち)の外には関心が希薄である。
自己は動く、または動かされる。



古事記の世界観

「天地の初めて発り(おこり)し時、高天(たかま)の原に成れる神の名は....」

日本以外のところはすでに存在していることを前提にして、日本列島がいかに創られたかに関心あり。

世界は存在していることを前提として認めた上での世界観。

時間の表現形式: 自己が現在、過去、未来に動くので
時間は止まる。
事象の中に「静」を感じる。

(3) 神さまと上さま

英語国人はあらゆる人間を自分と同一平面上の存在と見る
(対等な人間観、人間意識)

→(全知全能の)神=唯一絶対の至高神

日本人: 氏神=氏族神、自分たちと血縁によりつながっている存在
多くの氏族→多くの神→八百万神

上さま=神さま

(参考文献)

- 海部宣男「宇宙をうたう」(中央公論社・中公新書、1999年)
- 齊藤国治「星の古記録」(岩波書店・岩波新書、1993年)
- 堀田善衛「定家明月記私抄」(新潮社、1986年)
- 中西 進「古代日本人・心の宇宙」(NHK出版・NHKライブラリ、2001年)
- 中西 進「源氏物語と白楽天」(岩波書店、1998年)
- 谷川俊太郎詩集、角川文庫
- スーザン・ネーピア「辺境なるアルカディアー大江健三郎の「牧歌」と「反牧歌」」(平川、鶴田編「アニミズムを読むー日本文学における自然・生命・自己」、新曜社、1994年)
- 大江健三郎「みづから我が涙をぬぐいたまう日」(講談社・文芸文庫)、高田知波による作家案内。
- 大津栄一郎「英語の感覚(上)」(岩波書店・岩波新書、1993年)